

平成二十二年八月一日発行 第二十卷第八号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第三三〇号(毎月一回一日発行)

槐

かい

平成 22年8月号

岡井省二創刊



模糊として

高橋将夫

平凡か非凡か曲がりたる胡瓜
蒼天へ茂りの奥の大樹かな
隙あらば流れんとする箱眼鏡
屈玄と鍾馗の髯の端午かな

奥方に出さるるままに更衣
父母若しお花畑で見る夢は
極楽の砂はさらさら蟻地獄
風鈴や地獄の釜は黄金色
混沌を煎じてゐたる夏の夜
大瀧の真下は模糊としてをりぬ
欠くることなき阿字観の夏の月

槐安集

水野恒彦

麻蚊帳に昭和の闇は青かりき
太宰忌の夕べは永く蟹赤し
夏桜いま身に叶ふ淡さにて
稿にいて吾を信じる燕の子
月見しろじろと暮れ父の道

延広禎一

龍馬行く潮騒の朝羽蟻の夜
後朝の火蛾の骸と折鶴と
国盗りの城に出でける墓
舍利舍利舎利鱧の骨切る世話女房
葛ざくら大極殿に迦楼羅かな



加藤みき

大杉を伝ふ天水半夏生
あらぬ方にえんどう豆が一つある
松蝉や目の前にある潜水艦
をりをりに生臭き風螢の夜
おはやうの大きこゑなり朝ぐもり

石脇みはる

山の日が足元にあり花山葵
をだまきや古人の黄の衣
吉野川上築守帰るところかな
滴りや木立の中の能舞台
夏祭雲ふつつ切れし大櫓

中島陽華

惜春の富士の裾野のさくら棒
朱けの橋かかりし山の忘れ霜
黄道光やつとはんざき動きけり
白南風に首尾よく乗りし放れ駒
神化かな宝石箱のミニトマト

栗栖恵通子

湯かげんをみるに立夏の手首かな
その上_ミに蝶の木ひとつ黄道光
顔寄せて先師語らむ額の花
口笛の子等につきゆく蛩かな
まつすぐな櫛の目風の薫りける

竹内悦子

水流るるあたり八十八夜かな
松の花いつぱい咲いて裏鬼門
春蘭のうすみどりしてこの世かな
孔雀さぼてん咲きし一日の暮れにけり
臺交む天満宮の祝詞かな

大島翠木

ダム_ノ吐く水太かりき虚子忌かな
落ちて薄目の花沙羅森閑たる真昼
小満の竹のざはめく塑像かな
六連銭の旗たんぽぽやすかんぽや
石臼をほつたらかして芒種かな

雨村敏子

引鴨に明るき空や多宝塔
酢や杉も檜も瀧の音
山藤の梢は空に溶け出して
新緑や命のいろの音聞こゆ
球体はいのちの形葱坊主

小形さとる

寝て食うて五柳先生畑を焼く
遠謀のしばらく荻の角となり
手を振つて春野を行けば済みにけり
大南風獅子吼まことにのどかなる
蓮華山蹠にて風薫るなり

本多俊子

大白の大きな影の端午かな
母の帯身のきしむなり走馬灯
なげきの火海に置いたる螢烏賊
帰らざる音のありけり夏落葉
太陽は母の光よ臺交む

久津見風牛

蝶二つ憂さはらすごとと気儘なる
鱧ふかざめの菖蒲湯にをり顎あぎと上げ
小女子こなご網曳き手にまざる己がぬて
麦熟れて十萬億土つつがなし
蓮糸の阿弥陀をつむぎ掲げをり

近藤 きくえ

わら天神白き産衣に緑さす
大いなる老木つつむ夏の星
庭下駄の湿つてゐたる佛法僧
背よりやさしき言葉花槐
青葉潮羽根うちふるふ孔雀かな

近藤 喜子

水の辺の一行詩なり糸とんぼ
祈りつつ開く泰山木の花
未完なる若葉の青さやはらかし
ぼうたんや美しきもの見る二つの目
かたはらに妣の来てゐる新茶かな

谷村 幸子

白牡丹にかこまれゐたる持国天
波静か海を見下ろし粽食ぶ
鼻の声和尚法話の途中なり
見上げたる三輪の神杉五月晴
はればれと子安地藏に藤の花

瀬川 公馨

双腕に四月抱きてホームラン
春女苑どうせ金釘流ざんしよ
卯月野の満艦飾に溺れたる
カツポレカツポレ風を頬張る鯉幟
玉珧を炙れ炙れと囃したる

久保東海司

双つ蝶やがて卍と舞ひにけり
廻廊の寺苑の牡丹百程に
夕螢ところかまはず出でにけり
巡拝や菜の花満つる土佐にをり
日盛りや猫の胎児も喘ぎをり

松原仲子

草に木に空のやさしき更衣
暮れてゆく狐の提燈恋人来
風なくて揺れしものあり夏の色
有明の夢に父ゐる青葉潮
かわらけの深谿に消え蟻地獄



槐市集

杉原ツタ子

あづまやの席の空かずや夕牡丹
桐咲くや千手観音守りとす
藤棚の風に迷ひし女かな
母の日の大楠に頬つけてをり
先がけの勿忘草や一筆箋

鈴木勢津子

ケロケロと田は歌うなり卯の花くたし
舟の五色向き変へてゐる青葉潮
新緑の中の頤白楽天
桐の花見あぐ頂ニューターウン
人知れず孟宗竹は皮を脱ぐ

十川たかし

手に触れて姫小判草くすぐつた
朝方の夢まだ残る走り梅雨
ででむしの殻の冷たき真昼どき
カラー咲くセーラー服の通学路
葉桜や何もなくなる身のまはり

谷岡尚美

入学式期するものあり熱唱す
スイートピー小さき指で弾くピアノ
島影に潮満ちくるや初鯉
青磁色して絵手紙のはじき豆
けふ穀雨あまねく享くる大八州



槐集

高橋将夫選

夏の扉を開ければ青と黄と白と
安城 近藤 公子

少年の声のゆき交ふ夜の新樹
罪かぶり真つ赤となりし金魚かな
右耳にブルース左手に枇杷の実
脱皮せし少女遠泳はじめたる
石油缶に生きて騒ぞあぎて蝦蛄売られ
守口 柳川 晋

赤鱗も騙す 因幡の白兔
渦潮を造る男に観る女
華嚴的インドの先の大西日
舳へ乗りして峰なす雲に目を据うる
南山の麓に在りて豆を植う
岩下 芳子

鹿の子の斑の腹の波打てり
薫風の金毛閣を通りけり
大絵馬の馬の抜け出す臯月かな
ビル街のなんじゃもんじゃの花の照り

百合満開ルイ王朝の姿かな
岡崎 岩月優美子

新緑や心の波形おだやかに
竹皮を脱ぐ青雲の見ゆるまで
蛸泳ぐときには見せしブルカの眼
浜昼顔夢は追ふもの 掴むもの
ゴムまりの指はねかへす夏来たる
枚方 中野 京子

花のあとまはりの木々に染まりける
シナリオの修正ばかり花は葉に
玉ねぎの皮むきながら断念す
かたまりの雨降る朱夏の阿修羅像
水無月や胸につかへるものありて
寢屋川 前田美恵子

身の内の刺の融けゆく遍路かな
地を這うて餓鬼が来るなり片陰り
月朧隠しおほせぬ 女紋
丑満の風の声聞く利休の忌

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

夏の扉を開ければ青と黄と白と 近藤 公子
扉を開けたら夏の景色が広がっている。それを青、黄、白の色でストレートに捉えた感性に共鳴。青空とまぶしい光とゴッホの黄色に目がくらむ。〈脱皮せし少女遠泳はじめたる 公子〉や〈右耳にブルース左手に枇杷の実 公子〉もユニーク。

石油缶に生きて騒ぎて蝦蛄売られ 柳川 晋
石油缶の中で必死に生きようともがいている蝦蛄。やれ石油だ、やれクリーンエネルギーだと狭い地球で足掻いている世相が見えるようで面白い。〈渦潮を造る男に観る女 晋〉の皮肉や〈舳乗りして峰なす雲に目を据うる 晋〉の男気も捨てがたい。

南山の麓に在りて豆を植う 岩下 芳子
比叡山を北山と呼ぶのに対して、高野山を南山という。偉大な弘法大師のもとで、豆を植えて日を過ごす素朴さに共感。悟りの世界かもしれない。〈大絵馬の馬の抜け出す皁月かな 芳子〉にも、どこかのどかさがある。

竹皮を脱ぐ青雲のみゆるまで 岩月優美子
青雲が見えるほどまで、一皮も二皮も脱ぎたいという竹の心意気に感じた。ただの青空ではない。星雲の志なのだ。

玉ねぎの皮むきながら断念す 中野 京子
玉ねぎの皮を剥きながら、何かを断念したという。何を断念し

たかは言っていないが、なるほど、玉ねぎを剥く所作を想像すると、なにかを断念したくなる気持もわかりそうな気がする。〈ゴムまりの指はねかへす夏来たる 京子〉は素直で、好感のもてる一句。

月朧隠しおほせぬ女紋 前田美恵子
紋付を着た女性が歩いていく月の道。なんとも風情のある景である。朧月でも女紋だけははっきり見えているという。隠し切れないのは女の性と言ったら言いすぎだろうか。ちなみに家紋（男紋）には太い丸があり、女紋にはないのが一般的とも言いが、どうも明確な区別はないらし。

蔦芽吹く地上もつとも沸き立てり 富松 寛子
草木の芽吹く春の情景が「地上：沸き立てり」と見事に表現されている。心まで沸き立つようだ。

カモミール二人の午後を明るうす 近藤 紀子
カモミールはキク科の多年草で、全体に芳香がある。花は胃腸薬、発汗剤。乾燥した花を茶のようにして飲む。幸せなお二人に乾杯。

夢はまた錬金術師臺のこゑ 西村 純太
寝て見る夢も覚めて見る夢も、夢はいろいろなものを生み出してくれる。そういう意味では錬金術かもしれない。錬金術では金を作れなかったが、いろんな金属の発見に繋がった。臺の声がいかに妖しげ。(以下略)